

## 新大アジア主義—本格化する日台共闘運動

■永山 英樹／台湾研究フォーラム事務局長

※本稿は『祖国と青年』（日本青年協議会）平成15年6月号からの転載である。原題は「日本台湾は中国の一部ではない—外登証国籍記載改正を求め、台湾正名デモ」。

李登輝前総統を総幹事として、台北では「母の日」の5月11日、「母なる台湾」のための10万人集会「[5・11台湾正名運動](#)」が举行される予定だった。「台湾正名」とは「中国（中華民国）」なる国名を「台湾」へと正すこと。戦後中華民国に不法占拠されて今日に至る台湾だが、ここを「中国の一部」とする中華人民共和国の対外的な宣伝攻勢に対抗するには、最早「正名」以外にないとの切迫した思いが、この運動の背景にはある。

しかしこの歴史的集会は4月末に至り、折からの中国肺炎（SARS）騒動によって中止（9月への延期）が決められた。そこで急遽日本では、意気消沈する台湾激励のため、有志による「5・11正名デモ」が計画された。主体は在日台湾同郷会。そして台湾研究フォーラムなど日本人同志だ。それに日本青年協議会の支援も加わった。

そもそも「正名運動」は日本が発祥地だ。日本の外国人登録証では、在日台湾人の国籍が中国人と同様「中国」とされている。これが台湾人には自国否定の屈辱であることは言うまでもない。そこで平成13年、入管（法務省）に対する外登証国籍記載の改正要求運動、つまり「台湾」を求める「正名運動」が林建良会長（当時）率いる同郷会を中心に開始されたのである。これへの入管の対応は小国無視の傲慢なものだった。この自国政府の没道義的態度に、運動には多くの日本人も呼応し、銀座、入管、法務省で日台共闘デモが展開された。抗議活動は台湾へも飛び火し、以来「正名運動」は規模、内容を一挙に拡大させて行ったのだ。

さて日本の「正名デモ」は都内新宿の大久保公園→職安通り→明治通り→甲州街道→新宿中央公園の3キロ行程で行われることになった。職安通り周辺は言わば「中国人居住区」であり、ここでの通過は「デモ効果を一層高めるもの」（台湾紙『自由時報』）と期待された。そしてその後は大繁華街の目抜き通だ。道行く人々は「正名」の訴えをどのように受けとめるだろうか。

デモの訴えは、①台湾人の外登証の国籍記載を「台湾」に改めること、②「台湾は中国の一部ではない」、③「台湾人は中国人ではない」、④「台湾のWHO加盟を実現させる」、⑤「日台関係を強化する」の5点に絞られた。ここ数年の日本人の対台湾認識、対中国感情の変化により、「台湾は中国に非ず」「日台関係の強化」の主張は十分支持が得られるものと考えられた。「WHO加盟実現」とは、5月19日のWHO総会における台湾念願のオブザーバー参加への日本の支援を求めるものだ。この国がそれに加盟できないのは、「台湾は主権国家ではない」とする中国の執拗な妨害のためである。台湾でのSARS蔓延も、未加盟故にWHOの支援が得られないからだ。

そしていよいよデモ当日の5月11日午後、雨模様にも関わらず出発地点の公園には200数十名もの両国人が参集した。日本人の多くは個人参加で、しかも全国各地から集ったことは特筆すべきだ。何が彼等をここまで駆り立てたかは一考に値しよう。一方台湾からも「正名運動連盟」のトップ王康厚氏が駆け付けた。参加者全員が絞めた「台湾 台湾人」の鉢巻は台湾からの差入れで、元来台北で使われるはずのものだった。出陣式では陳明裕同郷会会長が檄を飛ばし、「健闘を祈る」との李登輝氏の日本語メッセージも読み上げられた。そして否応なく士気が高まる中、デモ隊は出発。諸団体の旗を靡かせながら、両国心を一にしたシュプレヒコールが開始さ

れた。

とにかく日台共闘デモは元気で明るい。何しろ台湾の新国家建設、日台友情の構築という「アジアの夢」を掲げたものだ。「過去への憎悪」に基づいた日中、日韓の反日集会とは根本が異なる。参加者は最終的には300人を超えたい。「途中から通行人が多数加わった。珍しいケースだ」とは、警察関係者の話である。沿道では別働隊が SARS に苦しむ台湾のため、「マスクを贈る募金」を展開、これにも大勢が応じている。

本格化へと向う日台共闘運動。合言葉は「日台共栄」であり「新大アジア主義」だ。無論「敵」は中国と日台の媚中勢力。そして当面は、日本政府を相手に外登証問題の解決を目指す。

デモの様子は台湾のマスコミ各社に大々的に取り上げられ、同国からは日本人への感謝、感激のメッセージが多数寄せられている。

日台だからこそできる提携である。多くの方々の運動への参入をお願いしたい。